

< 今日の説教のポイント ルカによる福音書 15章 11～24節 >
まず考えたいこと。放蕩息子の例え話と直前の二つの例え話との関係。

1 今日、直前の二つの例え話との関係を考えて読むことが大事。

この個所だけ取り上げても十分色んなことを教えられる例え話です。しかし、今日は前の二つの例え話との関係をまず考えたいと思います。先週目をとめたのは、三つの例え話がファリサイ人らに対して語られた点でした。そして今日の個所の「いなくなっていた」(24)は、実は、「見失った、無くした」(4, 6, 8, 9)と同じ原語です。すなわち、イエス様は弟の放蕩息子のことを、ファリサイ人らが良くないと思っていた徴税人や罪人(1)と重ねて見ておられたのです(次の、父と共に家にいた兄はファリサイ人らに重なります)。このことを覚えて読み直すと、神様(二人の父親)がどういうお方であるかが分かって来ます。

2 無理強いせず、私たちを根気よく待ち続けて下さる神様。

父親が、弟が生前贈与を求めた時に簡単に与え、彼が出て行くのを止めた様子もないのが気になります。一方、帰って来た弟を迎えた父親の姿から、弟が出て行ってからもずっと彼のことを思い続けていたことが分かります。イエス様は、聖書の神様はこういうお方なのだと示されたのです。すなわち、聖書の神様は私たちに無理強いせず、私たち自身が気づき、気づいた時に戻って来ることを根気よく待って下さる神様なのです! 「主は……一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(Ⅱペトロ 3:9)。

3 「我に返る」は、ただはっと正気に戻ることではない。

放蕩息子は、誰も自分を助けてくれない孤独の中に置かれたときに「我に返り」ました。これは原文でも文字通り「自分自身に戻って来る」ですが、自分に戻るにとどまらず、父親の元にまで戻って来ることを見逃してはなりません。キリスト教の基礎を築いた古代教父アウグスチヌスの有名な言葉を思い出します、「あなたは私たちをあなたに向けてお造りになりました。ですから、私たちの心はあなたの内に憩うまで安らぎを得ることができないのです」(『告白録』の冒頭の言葉)。私たち人間は、私たちを造り、私たちを誰よりも愛して下さっている神様の下で生きる時に平安と確信を得て生きることができる存在なのです。